



十五編五巻之角

三十四下

松野 膳普院

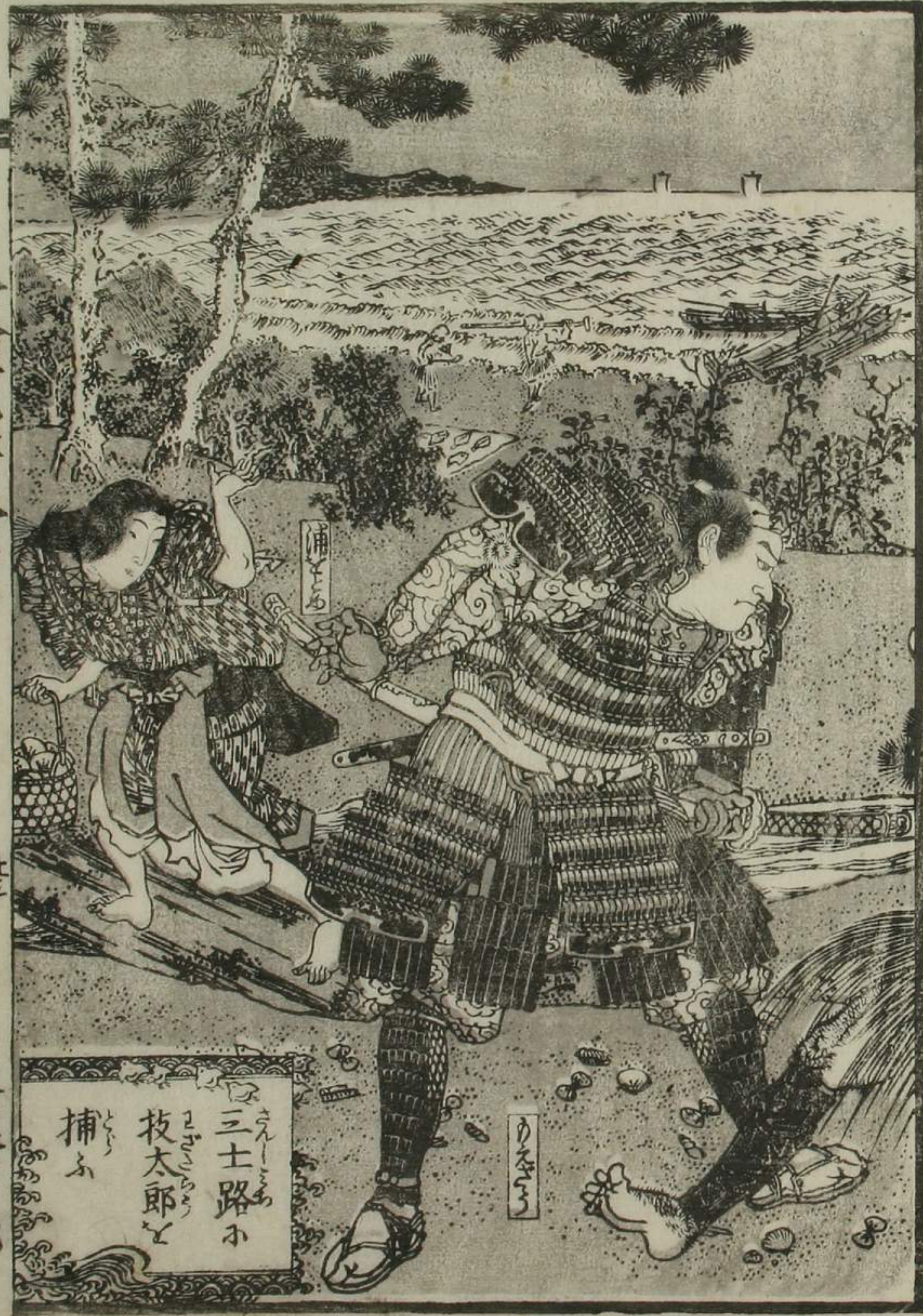
三十四下

第百廿回 瀧田の三士生拘を獻る
扇谷の間謀假使を導く

登時東峰萌云小湊目。鱗船貝六郎の軍令既訖。及之則
義成主不見。參して。臣等。老館の御意。俱參上り。の
故。臣等。總角の時。今。今。至るまで。老館。仕。ま。れ。ば。一。も。戰。場。の
御。伴。を。仕。せ。然。り。の。春。夏。の。間。素。藤。と。御。征。伐。の。折。も。人。人。の。功。名。を。柄。を。
と。美。美。と。思。ひ。ひ。の。今。番。の。御。封。内。一。郡。一。城。の。逆。徒。あ。ら。ぬ。敵。の。鎌。倉。の
兩。管。領。並。近。國。の。諸。侯。也。雄。兵。十。萬。水。陸。より。攻。伐。せ。り。欲。ま。と。云。風
聲。既。喋。々。と。臣。等。其。職。あ。ら。ざ。れ。ば。の。時。倘。共。侶。の。御。陣。小。從。ひ。な。り。
去。孰。の。年。を。俟。ん。と。思。望。の。已。と。し。の。圍。坐。を。宵。勤。の。折。々。の。受。と。情
語。の。人。老。館。小。生。古。多。り。歟。昨。日。猛。可。の。臣。等。と。召。て。御。説。あり。若。們。を。

血氣剛壯。校る。我は仕る故をりて。今回の役は従がれば。本意を
思ふらぬ。故若們三名を軍中の使として。明日稲村へ遣え。開戦の間俱
本陣に任じて。大士を敵と逆する武勇の掙を見習ひ。必後学するに
若們權且あるに在る。外は近臣をある。且致仕の老黨が。今日四個を
来ければ。我を尉する陪堂より。その美を館に稟せし。従役の暇をひく。臣が
軟ひ。おごり。御恩を待。言美まらる。退く。昨宵共侶。猛可に従軍
準備し。雑兵僅に十五名を従へ。今朝早天。瀧田を大城を立出。連
下。おごり。路あり。料。一個の艦。見を捕らひ。く。おごり。姑且時を移して。
方僅。参上。仕りぬ。と言同様。おごり。上れば。義成。主合。笑。現若們の情願を
武士。若の真面目。其心。樹。を。あ。開を猜。ひ。老館の御慈
愛。を。人。を使。賢慮。定。易。好造化。を。若們

今より我陣は居る。事ある。度。毎。瀧田。告。便。今日。俱
在陣。却若們。が。来る。路。を。捕。ら。ひ。艦。見。原。是。甚。麼。る。者
と。問。を。萌。三。合。て。おごり。然。は。高。嶺。を。過。り。折。前。路。一。個。の。僕
子。其。打。拵。は。洪。津。の。榜。の。筋。袖。を。鶉。衣。の。腰。蓑。を。た。地。方。の。浦。人。の。像
く。見。れ。る。人。と。おごり。音。聲。の。紛。々。も。あ。り。け。る。武。藏。記。で。は。臣。等。是。を。誑
す。艦。見。等。と。喚。れ。他。大。く。駭。怕。を。走。り。百。步。許。逃。去。り。け。る。と。透。き
追。蒐。け。り。掖。提。へ。有。を。を。を。緊。急。を。結。紐。り。敵。は。素。生。と。來。歴。を。責
問。け。る。艦。見。苦。痛。堪。え。ら。れ。招。き。よ。り。知。り。ぬ。其。奴。大。石。石。見。守。憲。重
が。同。謀。見。せ。憲。重。が。家。臣。仁。田。山。晋。五。弟。晋。六。武。佐。が。從。母。弟。を。朝。時
技。太。郎。と。喚。做。と。者。と。の。へ。躬。那。身。の。内。を。撈。り。檢。査。す。果。を。懷。み。る
扇。谷。定。正。主。の。機。文。數。通。り。開。を。の。の。御。國。の。民。毎。不。慮。ゆ。致。せ。り。御



三士路小
 技太郎と
 捕ふ

傳九郎卷二十四

九三

○大正



傳九郎卷二十四

○大正

疵さそまぐ欲りし身。伎倆分明の御陣へ牽せぬと報まれば六郎と
 身を起して外面に立出づ。伴の雜兵も索と合せて。件の朝時技太郎牽
 立つかのち。義成主の見せまわす。其の日の檄文數通を合せし。則御前
 呈覽を拜を見も。多夢もある。諸士の皆愕然と。一ひらち擧げ。又一ひら
 命と。愉快とを思ひける。當下義成主の遠藤田の之士の擗を譽言させ
 隨即杉倉直元其檄文を用せし。讀むと徐に所其書道なり。

諸侯上尊。帝王時朝。柳營下求賢才。善愛庶民。稟制於
 連帥。而結交于隣國。則可以為有道君子也。言有源義
 成者。其父義實。嘉吉叛逆。餘子也。當時免命。而流寓安
 房。又乘風雲之會。伐神餘逆。臣定包殺之。橫領其郡縣。
 又隨欺殺。滿呂安西。遂併得四郡矣。梟雄詐力。不一而

定其子。義成。奸且有膽。畧自美其箕裘。而來畧上總。掠
 下總。叨受領房總守護。以自稱東南大藩。然而不受制
 於連帥。不結交于隣國。加之役使。結城煉馬。殘黨大山
 道節。犬塚信乃。犬阪毛野等。皆以犬為氏。八箇強人。而
 使此在近國。屢放火陷城。暴行竊盜。無不為。又於其中
 有稱大江某惡少年。嘗幻奪隣國逆臣河鯉。孝嗣於法
 場。以舍藏焉。出沒無量。何皇毛舉。今也鎌倉兩管領家
 連諸侯。合兵將行天誅。大兵臨城。日玉石其與碎。若等
 房總洲民。俱欲去桀紂。就湯武。或謀而刺。義成。或捕犬
 氏。首來獻諸軍門。則其賞豈唯千金富貴利達。必在是
 舉。是以檄。其の漢文を和解して。國字にて寫す。由。數通わける。土民の

文字を免者。讀せしむる所為るべし。義成是をうけて。件の生拘技太郎を
 そが。後。面。前。の。牽。居。さ。る。る。み。つ。つ。解。諭。の。事。今。戰。國。割。居。の。世。方。り。く。
 人も我も各。同。謀。見。を。り。く。近。國。の。虚。実。を。撈。り。封。疆。を。守。る。用。意。と。を。
 然。る。間。謀。見。と。も。我。甚。く。憎。む。あ。ら。ぬ。今。這。檄。文。を。見。る。火。を。り。て。水。
 と。い。ふ。が。如。く。其。誣。と。も。甚。く。初。我。父。の。安。房。四。郡。を。得。ぬ。の。逆。賊。定。包。を。
 伐。滅。し。け。義。兵。の。致。を。所。で。滿。呂。安。西。が。自。滅。を。取。り。の。奸。詐。不。義。の。天。誅。
 の。然。る。信。時。の。景。連。の。賣。ら。れ。て。竟。身。を。殺。し。景。連。の。亦。八。房。の。犬。吠。
 ま。く。命。を。預。け。ぬ。誰。も。是。三。亡。滅。の。故。を。り。て。我。父。を。罪。と。せ。國。民。通。て。罪。
 と。せ。ざる。を。定。正。一。箇。の。臆。断。を。り。是。を。罪。と。思。ひ。何。と。そ。折。征。せ。ざ。ら。ば。
 數。十。年。麻。止。ぬ。今。今。一。是。を。い。へ。の。遲。く。と。也。且。我。が。上。總。下。總。を。伐。從。へ。
 ち。も。其。城。王。者。暴。戾。を。民。の。棄。れ。れ。と。取。れる。の。敢。詐。力。を。盡。し。苦。

戦。て。人。の。城。邑。を。奪。ひ。よ。あ。り。て。あ。の。皇。居。及。將。軍。家。人。調。貢。の。敬。礼。を。
 懈。ら。せ。し。む。隣。國。の。諸。侯。と。親。く。交。る。と。い。は。れ。ぬ。又。隣。國。と。い。は。れ。ぬ。一。か。の。
 兵。を。構。へ。る。と。も。天。子。將。軍。是。を。り。て。我。を。罪。あり。と。あ。の。官。領。軍。我。を。
 罪。せ。開。け。私。誣。や。公。論。あ。ら。ぬ。別。又。犬。山。道。節。犬。塚。信。乃。等。が。定。正。
 主。と。數。を。走。ら。し。一。旦。五。十。子。の。城。を。拔。け。他。者。が。い。ま。我。の。仕。さ。る。以。前。の。
 ち。あ。り。其。先。君。と。父。祖。の。為。の。聊。怨。を。復。せ。り。の。然。る。と。我。が。他。者。の。課。て。火。を。
 放。ち。城。を。拔。け。抑。亦。誣。言。を。り。八。犬。氏。の。母。の。其。未。生。以。前。も。我。
 家。の。宿。因。あり。あ。の。我。感。悟。る。や。あ。り。て。他。者。が。在。處。を。索。る。と。年。來。を。
 歷。年。の。春。も。夏。も。至。り。て。稍。縁。熟。し。て。皆。召。集。て。竟。不。家。臣。の。考。る。之。今。の。前。
 犬。士。の。母。の。生。來。感。得。事。り。あ。り。て。仁。義。礼。智。孝。悌。忠。信。の。八。行。を。各。丹。田。の。
 藏。ゆ。る。後。傑。る。を。り。其。行。狀。一。個。と。て。仁。義。八。行。の。稱。さ。る。一。去。の。我。を。

知れる人もあらず。誣言強人といひつゝ、寔は沙汰の涯之況孝嗣と云ふ。我
 いま是を見ぞ他へ靈狐の帮助ありて罪する死刑を免れんと人の噂ふ
 望の願ふ定正王早く怨怒の妄想を祛け、善小與する徳をのたま
 自他の民相悦び、永く唇齒の好を結ん、憐れも解ども猶悟らぬ其行を
 飾り、其非と理とて、敢勝負と決せんとすべからず、防衛の備あり、前執
 る身へ辭さる由る。爾還らざる。憲重は是等の美をよ報く。定正王は
 諫める。定正遂に感下空て思ひかへともあるべし。多ぶ両家の幸ひるん、什
 麼か美をよ見や。といれて、技太郎頭を拾ひて、御説兼り、以て仰の條
 條胆銘して、憲重に報ひつむ。いそ免さるべし。願は義成主領にて、然
 もあらん卒然、三日前、其技太郎の撰する素を解、饒して、浅船の
 乗せ、返り遣う。ねたの地、留むべし。と仁慈の下知、萌三智の志をあら

技太郎が素を解んと。登時道節休む。松よと禁め、技と出く。義成
 主を諫る。世に稀なる御慈命を、否、まらざる。不敬の罪を免さるべし。
 とも、盗小糧を齎し、雙言の刃を借さる。聖賢のせざる所あり。宋襄の仁も
 過らざる。非如寛仁大度とあり。這奴を饒し、あとも。定正、愚將之、又憲重
 慳臣、俱に道理を暗ければ、這仁命を受容れて、其行を改る。由あるべし。
 此、夫人の臣として、君の悪を長ま者、其罪猶輕し。君の悪、逢ふ者、其罪
 是重しとある。經文ありて、思量する。那憲重親子の如し。君の悪、逢ふ者、
 る。る。よく理を知り、主を諫め、いんや。且檄文を散き、敵の間諜、兒は這奴
 一個、さるべし。然、我安房の國民、義不明る。稀るべし。檄の誣言、
 惑されて、叛く心の馮もせ。則、是自家の害、早く、這奴が首を斬せ。衆小示
 去め、御後悔のやいと、憚る所も、論を、毛野信乃、莊介、小文吾、現八

篇も載てい欲約莫言の品出語いづるを予看と一も公愛の誰も知りたる
 多る御軍令も庶一とせん欲そを左も右もわれ今番寄隊の惣大将扇
 谷定正主の臣等が先君先父の冤家ゆく今館の鯨言敵えんとて戦の
 時小蒞く備前前立りてあらん射て殺まはるるを免るを饒一ゆえんと
 回ハ義成主領多々汝が疑ひ开も亦故あり我嘗上古の聖王仁君の軍を
 憶ふ不敵其敵を屠り人を殺まはるるを只逆を討ち異業を懲一と
 りく其民を救ふの然今我敵と待つ防と上目とて殺まを宗とせむ
 めをりて汝等七名を防禦使あらりし防せ為りて戦ひ不克を功と
 されども首を捕るを好とせむ是仁人の心るを余も防御とらふ又差
 大勇の大敵を防ふ必と謀を以て故に戦むて敵と退る者
 其次は防せ或は殺し或は走らる者又その次の防はも竟不防に

ぬぎ弓折を勢ひ必射りて戦死して名を貽せの誰う敵を憐くも戦ふ者
 あらん機不臨も斐ふ心とて進退並没疆りる乱戦奔馬の中や。豈
 只敵と生物んと戦ふ者あるべしや其敵を憐むらん。戦さる前不在り
 又戦克く後もあるべし昔唐山秦の蒙恬ハ趙の降卒四十萬を宥る
 報いりて後竟不趙高誅せられ刃伏しゆり箴とるをべし然我軍
 今不敵の首を捕る者を罪せんとあるべし言テ看まといれもせぬ我他を伐
 る欲せ他も我を伐も己を殺るる所もあつべし刺もあつべし殺
 るも功とせざりし則仁の心人の義を思ひ違へと解きて道節沈吟
 莞尔と笑み頭を拾はく御教諭愈佳境入りし滋感服仕ぬ今の御
 諛の只臣等が疑ひを解せるのを備前の御諭微りせば疑思者もあつべし
 相あるゆて心と志をまれば義成主の辰相と清澄をたると汝今之言我安

了や道節が忠誠を其方正直言の我守く所の人あはれ今その言を取
 いふも後必禪益むらん喜ぶべくと稱え多へ辰相清澄共侶の拜賀して君
 君れ臣も亦臣さる當家永昌疑ひる。其欽びを宣示せむ毛野信乃莊
 現八小文吾自餘の毎亦至るまで孰う感服せざる死俱千歳をぞ唱へる
 而東峰萌云第の二と上旨と浴て則朝時技太郎不被る索を解免せむ技
 太郎恩を拜せ外面へ退給せむと雜兵も守りて洲崎の港口へ移りて
 隨即快船もち乗せ武藏の柴濱まで送りけり。小程朝時技太郎も
 宵悄悄地五十子の城かへり來り主の石憲重の安房あり事の顛末
 義成主のいれる那仁心の大きなるぬを毫も隱さず告ぐ。憲重の守りも呆
 らと半响許さざると思ひ復せ美言の信あり甘言の反て毒あり開き
 敵の心を鏢し是義成が詭りの計をんとて敢又機念せむ且己が遣し

たる間謀見の一旦敵の搦捕られて饒されてかへるを王君の報んはさか
 只技太郎が口を鉗め自家の士卒もあつたを知らせ軍敗れ後の日小定正
 是を知らず且恥悔し思ふもの竟其甲斐をりけり。あは是後の話不題
 義成主の軍令既成り。又水陸の隊配と定めり。水戦の惣大将は義
 成主自任して洲崎の濱邊の本陣に在り。軍師大坂毛野防衛使大山道節
 犬村大角を首め。小林但一郎高宗浦安牛助友勝等相従ふ。這隊の士卒
 一萬六千之内中犬村大角の今敵地に在り。あはれも水戦の與るべし。あは
 友交の名せられ。又下總の行徳へ防衛使大川井壯介を大将やて。犬田小文
 五口を副將と登桐山八郎等。是は從ふ隊の士卒。八千五百。又下總の園府
 臺へ里見御曹司義通を惣大将や。東六郎辰相後見。杉倉武者助
 直元等相従ふ。龜城まべと定めり。其城外敵と待つ。大将の防衛使大

つるまのふせうのぬまはてちのきびしちりたのすけとともら。これあがのうちとあそろくせんこ
 塚信乃副将大飼現八並田税力助逸友等是も従ふ内外の士卒九千五
 百との餘印東小六郎荒川太郎木曾三助東峰萌三小湊目鱗船
 貝六郎の遊軍や。俱も洲崎の陣に在り又稲村の城に義成の二男次丸を大
 将や。荒川兵庫助清澄後見たり。その他老黨若黨相従ふ龜城の士卒一千
 五百との時満呂復五郎重時ハ刀瘡や登々愈々く。則も洲崎の陣に参りて
 孰の隊とも屬られんを請ひ稟あが義成主臈て復五郎を召よむ。汝ハ
 大川莊介大田小文吾も従ふ。行徳の敵に向ふべいと定めらる。隊配既も果々。
 この宵義成義通父子洲崎明神も参れ龍あり。祈請の筒牘一通も白羽の征
 箭二條を添く。神殿も藏めなる。神主巫祝も管絃を奏せ。舞樂の時も方
 了て。社前も松の重枝より。白鳩二隻忽然と蜚出く。大洋の方戌亥を投て。翔々
 見え渡るけるも不思議な鳩の飛ぶも早に物もれが和名ととこといとも東雅也

いける。そこのやとびの省畏見。これともあの日十月二十八日寅の二刻をさるる月を
 鳥夜や。這鳥瑞あり。必神所為るべし。士卒各勇も憑く思へん。徳
 而這詰朝國府吉堂と仍徳も敵を待り諸將士卒へ義通御曹司を首て大
 塚信乃大飼現八東六郎杉倉武者助田税力助も前後二軍の兵を領り。
 早天も稲村を進發せ。又一軍も大川莊介大田小文吾登相山八満呂復五郎等
 其隊も従ふ士卒を領て。同時も又稲村より行徳を投て出陣せ。其光景も甚摩
 ぞも。但見る。旌旗幡幟ハ曉風も翩翻り。鎗眉尖刀ハ朝日も赫赤く。人の鎧の
 袖を連て。兜の星も明る天をうち仰馬も真紅の總を無く。鑢の音も共ハ嘶
 く。征客控天の勢も妻子留別の涙も顧ぎ。其去向も山あり川あり。水仙ハ日南も
 花も見。野梅も冬至も額都る。霜の柱も氷の上も絨も落葉
 あり。安房上總も春寒く。冬暖地地方といへも折々も是も小寒の節も人馬の吻

息白く見え。早朝の耳研るふ似る。頭盛の鏡も冷れ、弓矢維張
 鏖砲各肩を其武其勇決然と只這兩軍のさる。洲崎の濱の本
 陣の形勢も亦思ふ。波濤在処より二百歩許退はて小阜の地方の夜屋
 あり。中央の義成主の屯する処も十二間八間ある。左右の毛野道節も守備処
 各數百人を容れり。内外の一萬五六千の士卒。幾も張耳。幕の
 陰に在り。浦風靡く白旗と磯馴松の被れも散る。水際も維だ。戦艦も舳
 尖を並べ。數るふ違あむ。馬の熟て水と怕れ。人の勇も敵を避。とを刃ら
 鞋より頭れ。弓の囊と用を隠る。火銃の燃線。潮風も濕ら。旗々々火
 箭の準備。櫃より。ささ。てあり。壘。戦米の積れて。古の棟。菅。穩
 る。小駝馬の敷系れて。運送の便りと。暇ある。雑兵も鏃と磨。沙の坐る。航工も
 帆を繕ふ。鼻々と响く。吊腿の音。鼓々々と鳴る。二六の大鼓。抱。開。鼓。杵の。敬言。士

卒の打腕を散馬。雜居飲酒の林の。大將との。饒。畫の貝も吹く。時成
 報け。夜の篝を焼く。夜行と叫ぶ。往く者。名告り。還る者。名。只是齊
 齊整。細。説。書。盡。さ。む。あ。む。の。什。が。一。あ。あ。け。既。中。て。十。月。の。果。て。十
 二月五日。ふ。る。ぬ。の。日。大。大。角。が。曩。武。藏。の。柴。濱。へ。お。り。あ。け。る。兩。個。の。伴。當。情
 地。快。船。を。乘。走。る。洲。崎。の。陣。か。ら。あ。る。隨。即。毛。野。の。對。面。を。請。ふ。大。角。が
 密。書。と。衣。領。の。裏。に。あ。る。合。出。の。渡。一。を。且。来。意。を。告。ぐ。毛。野。も
 道。公。節。を。招。か。せ。俱。其。書。を。開。見。て。然。と。大。さ。る。先。其。使。の。水。路。不。障。り
 る。て。速。ら。し。と。答。言。て。留。置。す。馳。て。本。陣。に。赴。き。則。義。成。主。の。件。の。密。書。を。見
 せ。あ。る。計。議。果。て。又。の。命。大。師。と。大。角。が。那。地。で。計。り。給。る。首。尾。至。妙。小。い
 へ。今。宵。堀。内。自。任。の。選。兵。百。五。十。名。を。從。せ。早。く。那。地。へ。遣。り。八。百。八。十。人。の
 密。策。の。其。一。隊。を。足。る。べ。れ。ど。敵。の。衆。船。一。緒。不。在。る。燬。を。免。る。も。三

ふへい。あどりく。音音も四個の婦女子ども。今宵遣いひん。その美の亦箇様
箇様と言詳。其の宣せ。義成屢點頭。开も亦汝も任してん。貞住
其他が歸府せ。日小件の密議を示し。あろろそあへけれそ其計ひを
いそせのへ毛野の則退りせ。先堀内雜魚太郎貞任と浦安牛助友
勝。事の秘密を説示し。其後東峰萌三。小湊目。鱒船貝六郎等。情
地招死をぞ談せ。和殿等の當職。原是老館の御使。瀧田へ戦の
注進を。宗とま死若るれども。然るもろの。閉戦。小遇。けれ。本意。ろ。ん。あせ
り。我館。請。まり。和殿。等。の。十二分。の大役。を。課。せ。東峰。鱒船。の。雨
生。今宵。我。投。せ。方。へ。隊。兵。を。領。く。ゆ。ね。か。その。投。せ。方。の。任。々。又。其。計。ひ
箇様。々々。又。小湊。生。の。異。日。遣。せ。死。地。方。あり。その。計。ひ。箇様。々々。任。々。の。一
美。と。言。詳。小説。示。せ。二。個。の。壯。伎。怡。悦。堪。げ。合。笑。ま。共。侶。小。其。計。策

あそ。その。と。た。け。の。こ。り。ふ。と。う。で。これ。の。え。き。う。く。い。ろ。く。こ。よ。そ。て
中。を。從。ひ。け。當。下。毛。野。の。村。節。を。合。出。る。是。を。萌。三。と。貝。六。小。渡。與。を。其。隊。小
從。者。兵。卒。を。授。け。隊。配。早。く。定。り。けれ。毛。野。の。這。三。個。の。壯。伎。等。を。退。せ。て
又。浦。安。牛。助。友。勝。を。招。け。相。伴。を。潜。び。て。稻。村。の。城。か。の。あ。つ。俱。小。堀。内。の
宿。所。小。造。り。て。隨。即。千。代。丸。豊。俊。小。浦。安。友。勝。を。引。逢。し。て。今。宵。妙。真。早。節
等。と。敵。地。へ。遣。せ。快。船。の。舵。工。小。做。せ。り。と。其。示。し。て。敵。の。寄。寄。る。あ。の。月。八。日。に
和。殿。の。當。日。小。箇。様。々々。と。其。進。退。を。示。され。豊。俊。等。悦。美。て。猶。潜。り。て
小。箇。様。居。り。毛。野。の。則。退。れ。音。音。妙。真。曳。小。單。即。を。悄。地。小。別。室。小。招。れ
集。て。且。友。勝。と。俱。小。件。の。密。美。を。談。ま。程。小。堀。内。雜。魚。太。郎。貞。任。の。暴。お
心。痛。の。病。發。り。ぬ。と。佯。り。唱。て。洲。崎。の。陣。を。辭。し。去。り。其。隊。の。士。卒。百。五。十。名。を
從。令。稻。村。の。城。内。宿。所。か。の。あ。ふ。けれ。毛。野。の。則。貞。住。と。這。圍。坐。小。招。れ
入。れ。更。小。又。談。ま。御。向。那。一。美。の。崖。略。を。傳。へ。と。大師。と。大。村。小。授。け

たる。計畧既おゆれて敵の月初の八日必推寄來つべしと告あそけは、大
 角が密書あふあり。是ふよりて堀内生其隊兵百五十名と俱小。漢者の如
 く小打粉て甲冑を各其船底に推隱し。五七箇の鯨舟あちち乗て今宵
 悄地ふ其投を方へ赴ぬ。我犬村が密使を御導の爲に留置死ら。則他を
 うち載て其投を浦の漕もく大村の對面易く候べし。大角が那地を偽名
 赤岳百中、大師の偽號の風外道人。即是に那里不到りて後の進退を
 必大角が意中衣あむむ。其の美をあらぬぬね。却又音音の刀自名は是と異
 なる。今宵豊俊が降参の密使と伴りて快船あちち乗りて五十子の城へ赴く。小
 四個の婦人同船せ。敵の其使の女子のをも。且其死を疑ふべし。其の故は音音の
 自の鬼多と俱小先とち。五十子の城へ赴て箇様々々といふ其折敵の士卒を
 が豊俊の書翰るを見。必是を疑ふ。拒とて巫信さる。登時妙真

刀自と單に即ちの浦安生小船と操る。別船あちち乗りて赴續は那地へ
 到りて其死をうの擲事の倉卒と。豊俊が降参の口生書とされ。其の故は
 又奴等とりのまわると伴り。其書と敵の士卒の遺書と使の婦人言
 とも疑む。信容れん。去れども其の邊に那技太郎と相似。敵の間諜見猶
 在るべし。あちち我又箇様々々の算計あり。這密策其圖の中ら刀自の愈
 信容られん。其の既小浦安生小示し。中ら物怪の幸をべし。又意敵
 千代丸と面善。其の心其眼見。刀自の一兩個の舟を儘船に留置せ。水
 戦おれもく。其餘の城へ召入れ。人質をせ。其城に入る者箇様
 箇様小計りたる人。又船に在る者。開戦の時臨。便宜を以て敵の艦を焼
 くべし。勿論火戦の算計。大角と堀内生の一隊を必し成し。其の故は千代丸。這一役を
 艦の三々を皆一度に焼され。中ら漏るもあらん。其の故は千代丸。這一役を

課せしん。信謀のゆゑ。我々憶ふ。約莫這頭。成長る。武士も。莊客も。皆總
角多。比の好。水小。戯れ。船を。操る。と。浦安。生。今。宵。の。舵工。是。元。音。入。れ
一人。七。但。其。先。船。あり。舵工。る。渡。莫。音。音。の。刀。自。ハ。早。く。より。水。戯。を。は。り。と。時
取。舵工。あり。とも。必。渡。さん。加。旗。猶。幸。あり。大師。が。這。黄。昏。より。那。雍。尾。襲。の
玉。を。り。こ。こ。那。里。赴。く。船。順。風。を。與。へ。と。大。角。が。書。状。在。り。開。ち。堀。内
生。の。與。れ。とも。刀。自。等。も。究。竟。の。便宜。然。ら。ば。櫓。械。を。操。る。とも。船。を。か。の。づ
か。う。那。地。不。届。ら。ん。の。受。も。あ。ろ。易。く。居。べ。い。餘。の。事。の。曲。々。今。我。指。揮。不。違。あ
ら。む。あ。ろ。ゆ。ゆ。と。説。示。せ。ば。貞。任。友。勝。の。感。と。く。已。ま。む。妙。真。音。音。鬼。音。單。即。の
比。皆。共。侶。不。悦。美。々。水路。の。准。備。を。做。せ。程。の。毛。野。ハ。人。々。辭。一。別。れ。て。い。そ。然。と。陣
所。へ。還。り。け。り。介。程。の。音。音。鬼。音。の。這。頭。の。浦。の。世。を。不。疑。る。發。婦。の。像。ハ。打。檢。て
其。曠。昏。の。城。を。出。る。毛。野。が。教。一。浦。邊。を。見。る。果。と。水。際。ハ。維。だ。と。一

艘の快船あり。隨御れ。舟り。乗。り。曳。多。と。俱。漕。出。ま。ふ。大法師。が。那。玉。と。り。て
あ。も。吹。ま。る。あ。の。折。り。順。風。へ。け。れ。ば。席。帆。揚。て。ま。る。小。日。の。暮。昏。て。鳥。夜。る。れ
ども。船。穩。や。迷。ひ。も。せ。坐。し。て。其。曉。天。ハ。此。不。濱。の。船。果。ス。け。り。有。信。り。一。程。の。妙。真
と。單。即。の。音。音。鬼。音。ハ。此。一。後。れ。て。浦。安。友。勝。ハ。相。伴。ま。る。二。個。各。形。貌。を。畫。し。て
其。投。ま。浦。曲。ハ。來。て。見。る。あ。も。毛。野。が。准。備。を。け。り。一。艘。の。快。船。あり。且。其。邊。ハ。一
個。の。浦。人。漁。火。を。燒。き。居。り。火光。ハ。友。勝。と。透。一。見。て。和。殿。ハ。濱。縣。馬。助。を。ま。よ
ひ。れ。日。暮。る。奶。々。と。妹。子。と。を。ね。い。そ。も。何。れ。と。向。ハ。友。勝。あ。ろ。ゆ。ゆ。然。ハ
と。和。殿。も。豫。知。る。故。主。圖。書。殿。の。與。ハ。扇。谷。家。ハ。降。參。を。請。ん。と。方。僅
我。故。朋。輩。其。甲。の。妻。と。女。兒。が。悄。地。ハ。這。頭。より。船。ハ。乘。り。五。十。子。と。投。ぐ。も。れ
か。ど。鈍。や。懦。り。と。要。緊。の。目。主。書。を。執。忘。れ。他。考。を。追。蒐。を。開。き。遊。樂。さ
ん。と。來。ぬ。和。殿。も。船。ハ。乘。り。ま。よ。と。い。を。其。人。等。ハ。思。ふ。馬。助。知。ま。里。見

殿の仁心も我故主を誅戮せむ。今も固圍小類る。今番の恩劇小當
 管見の憐る隙を現る。固圍を破り。扇谷へ降参せむ。破りし隙の不義の
 多く且危し。いづ日稀る便り不就る。我も亦その義を告ぐ。當圍小世を潛ぶ
 我殘黨小徇修く。力を勸せよ。といふ。これ我の呆さ。心せせ。己ねと林示
 先友勝胡意冷笑ひく。忠義小疎は知漢くる。殘黨既小同意を主を竊
 出さきく。旗と賜人日遠くをその折。後悔を猶論去。死よりあれども。去向を
 いそげ。今宵ハ饒さん。先々といひ。妙真軍節を引立て。船小乗人と水際小
 寄ると。件の漢子酷く奴心して。ちねと一聲叫び。果む衝と身を起して。携り
 林を友勝を身と反して。撲地と投る。白打の精妙。件の漢子の船手り。こ
 沙を散して。浪ぶ時頭を磯石小撲せけん。満面忽地血小塗れて。仰反り。あ
 息絶けり。その時一個の艦。見あり。姑且磯松の林陰小身を潛め。事の光景と

現ひ。これ憶むも。ややと聲と。楳と。楳と。出歩小出さ。多。船を友勝のうら。白ひ。こ
 通の濱縣主とやら。今甲乙の問答。おと。猜を。和殿と。那上總を。楳
 本の敗將千代丸主の殘黨。る。徳云。酒家の大石見守。憲重の。問謀。見天
 岳餅九郎と喚る者。和殿も。五十子の城へ。推参。欲り。ぬ。咱も。同船
 幸。汲引を。ま。その。只。和殿。の。為。の。も。我。亦。這。挿。を。り。過
 分の賞禄。千。委曲。の。船。を。穿。く。卒。々。とい。せ。せ。友勝。憶。む。ち。笑。れて。開。け
 料。ら。び。幸。之。要。多。た。奴。の。障。辱。せ。れ。言。も。費。し。時。を。程。し。ぬ。今。の。先。を。火。家。の
 船。小。二。里。も。三。里。も。後。れ。ぬ。け。あ。る。が。案。内。を。憑。り。ゆ。る。と。い。ひ。妙。真。と。軍。節。を。と。せ。て
 他。者。の。我。母。と。女。弟。之。既。小。内。應。の。計。較。あ。ら。女。流。と。あ。地。小。在。甘。後。日。の。安。危
 心。許。る。故。ふ。ら。載。く。あ。る。ま。ま。の。義。も。憑。と。宣。示。せ。と。い。ひ。餅。九。郎。點。頭。て。好
 好。女子。の。障。り。る。い。そ。べ。し。と。い。ひ。軍。節。が。も。を。掖。杖。け。徐。小。船。小。乗。を。と。友



八代将軍徳川吉宗

廿六

八代将軍徳川吉宗



八代将軍徳川吉宗

大徳堂

猿八友勝と
 猿樂して餅
 九郎を釣る

勝の妙真を馳せし船の遣り居て其身も俱か乗る程餅九郎の縄解て早
 く漕ぎ快船の追風とされ船前の如く大洋遙か出よけ然ハ友勝の投らま
 死せると見えたる件の漢子の姑且して頭を拾ひて亀の像く四下と見えの蛇の
 似く五體を伸してまゝ身を起して汀渚の潮水と掬ひ洗ふ鮮血の豫准
 備の餉燕脂を洗ふ隨ふ瘻の。軀も拭きて幾番顔面を拭ひて草
 へ獨笑して例崎の陣所へかゝる。亦毛野の謀る処の邊の扇谷の
 同謀見徘徊して虚実を現ふ猶中んと思ふ心を友勝の徳々と耳に誨え又猿ハ
 と喚做ま一個の雜兵の好ま猿樂をう做ま者も件の謀計とゆひせ果して
 敵の同謀見餅九郎と釣出して反々友勝を引よる畢竟空る。這
 計暗合し。後の話説甚麻をぞ開の下回解分を聴ねが。

南總里見八代傳第九輯卷之三十四終

